

山の神のうつぼ

うつぼというのは、獵師や兵隊が身につけている矢を入れる筒、矢筒のことです。むかし、あるところに、目の見えない旅のお坊さんがいました。お坊さんは、琵琶の箱を背中に背負って、ひとりで旅をしていました。そして、泊めてもらった家で、お札に琵琶をひいて聞かせました。

あるとき、お坊さんは、道に迷って、山の中で日が暮れてしまいました。しかたがないので、大きな木のかげに琵琶の箱を下ろして、大きな声で木に向かっていいました。「もうし、山の神さま。道に迷って日が暮れてしまいました。今晚ひと晩、ここに泊めていただきます。そのお札に、琵琶を一曲語りますので聞いてください」

お坊さんは、琵琶をとり出してひきながら、「平家物語」を一曲語りました。すると、どこか高い所から声がしました。

「さてもさてもおもしろい。どうぞもう一曲語って聞かせてくれ」

お坊さんは、ふしぎに思いながら、もう一曲語りました。すると、また声が出て、「たいへんありがたかった。きつとつかれたでしょう」といいました。

しばらくすると、だれかの足音がして、おぜんにいろいろな食べ物をもせて持ってきて、お坊さんの前に置きました。お坊さんは、おどろきましたが、お腹もすいていたので、たくさんごちそうになりました。そして、木に向かってあつくお札をいって、その晩は、その木の下で寝ました。

あくる朝になると、ひとりの獵師がやって来ました。獵師はお坊さんにいいました。

「あなたを人里まで案内するようにと、いいつけられてきました。このうつぼにしっかりとつかまって、わたしの後についてきてください」

獵師は、太い毛皮の筒のようなものを、お坊さんの手に持たせました。お坊さんは、よろこんで、うつぼの先を一生懸命つかんで山を下りて行きました。やがて、遠いところから、犬やにわたりの声などが聞こえて来て、村に近くなったことが分かりました。

そのうち、村の子どもたちが、おおぜいで山を登って来る話し声が聞こえました。そして、ひとりの子どもが、不意に、大きな声で、

「あれ、あれ。あそこを見てごらん。お坊さんが、おおかみのしつぽをつかまえて山から下りてくるよ」とさげびました。その声を聞くやいなや、獵師は、あわててうつぽを

ひっこめて、もとの道を走って帰りました。獵師と思ったのは、じつはおおかみだったのです。

やがて、お坊さんは、来合わせた村の人に、村長の家へつれられていきました。お坊さんは、村長に、

「昨夜は山の大きな木の下で休んだのですが、山の神さまに琵琶をひいてさしあげました。そうしら、たいへんなごちそうをいただきました。夜が明けると獵師が村までつれて来てくれたのです」と話しました。村長は、手を打って、いいました。

「なるほど、それで分かりました。ゆうべとつぜん、うちの小さな子どもが妙なことをいい出したんです。『おれはこの山の山の神だ。今夜はめずらしいお客があるから、ごちそうをこしらえて山へ持ってきて、大きな木の下に休んでいる人にさしあげよ。すぐに持ってこないと、この子の命をとってしまうぞ』そういつてあばれるので、家じゅうで心配して、いそいそおぜんをこしらえて、山へ持って行きました。それでは、山の神さまのお客というのは、あなたでしたか。よっぽど琵琶がおじょうずだとみえますね」

村長は、お坊さんをたいそう手あつくもてなしたということです。

おしまい

村上郁再話

原話：『日本の昔話』柳田国男／『柳田国男全集25』筑摩書房